山形新聞　（第三種郵便物認可）　第49761号

佐藤そのみ監督　東日本大震災の経験基に2作品制作

古里一変、それでも撮りたい

宮城県石巻市出身の佐藤そのみ監督(27)＝東京都在住＝が東日本大震災の経験を基にした自主制作映画2本の上映会が来月3日、山形市の山形国際交流プラザで開かれる。佐藤監督は震災当時中学2年生で、石巻市の大川小に通っていた二つ下の妹を亡くした。本県での上映は初めて。佐藤監督は「映画を見て感じたことを遠慮なく話してもらいたい。震災を遠くに感じないでほしい」と語った。

来月3日、山形で上映会

上映するのは、震災直後の同市大川地区を舞台にしたフィクション「春をかさねて」（45分）と、大川小で友人や家族を亡くした子どもたちの震災から8年半後を追うドキュメンタリー「あなたの瞳に話せたら」（29分）。ともに2019年に撮影した。

佐藤監督は、小学生の頃から地元の美しい景色や住民の親密さなどを映画にしたいと考えていたが、震災で生活が一変した。妹が奪われ、古里も変わってしまった悲しみの中、取材される側となり、見る人の都合によって事実が切り取られることに違和感を覚えた。大川小は妹も含め児童と教職員計84人が犠牲となり、一部遺族は学校側の対応に過失があったなどとして市と県を提訴した。

「先生の遺族もいて、裁判をする人やしない人、積極的に発信する人や悲しみに暮れて引きこもる人などさまざまな大人を見た。震災で温かい場所がそうではなくなってしまった。古里がぐちゃぐちゃになった」と佐藤監督。それでも地元で映画を撮りたいという思いは消えず、日本大芸術学部映画学科に進んだ。

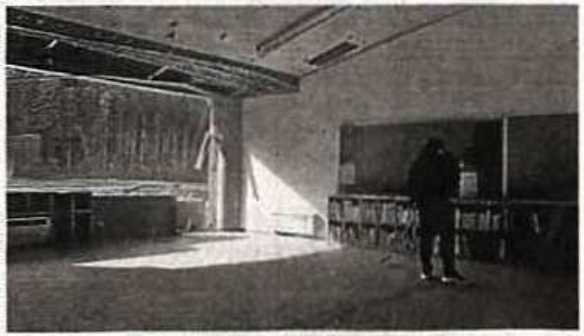
3年間は課題をこなしながら、濱口竜介監督や小森はるか監督らプロが手がけた震災の映画をくまなくチェックした。「きれいさっぱりと忘れることはできないが、映画という形にすることで次の人生に進むきっかけになるかもしれない」と考え、1年休学し大川地区で「春をかさねて」を撮影した。出演者は地元住民を中心に集めた。主人公は津波で妹を亡くした14歳の女子中学生。次から次へと訪れる記者の取材に応えたり、ボランティアの大学生に恋心を抱く友人に嫌悪感を抱いたり、若者、被災者の視点で思春期の子どもたちを描いた。

「あなたの―」は当時の子どもたちに焦点を当てた。亡くなった家族や友人に宛てた手紙を織り交ぜながら、震災をどのように感じ、生きてきたのかを表現した。2020年の東京ドキュメンタリー映画祭短編部門で、準グランプリと観客賞に輝いた。

3日は午後1時から2本続けて上映し、同2時15分から佐藤監督と小森監督のトークショーを予定している。午後3時半からは震災直後、岩手県の「陸前高田災害FM」でパーソナリティーをしていた女性を追ったドキュメンタリー「空に聞く」（小森監督、73分）を上映する。いずれも無料だが、事前に申し込みが必要。定員になり次第締め切る。問い合わせは山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局023（666）4480。（木村友香理）

東日本大震災の被災者の視点から震災を題材にした映画を手がけた佐藤そのみ監督

「春をかさねて」の一場面
（©Sonomi Sato）



「あなたの瞳に話せたら」の一場面
（©Sonomi Sato）

2024年2月28日(水)
山形新聞